即ち日清間の危機逼れる折の味歌を見るに、

いたづらに、何をかいはむ。事はたゞ、
この太刀にあり。たゞ此太刀に。

など、その最も輕佻の笑ふべきもの、纔かにそれかと思ほゆるものは、全集を通じて、

尾上には、いたくも虎の、吼ゆるかな、
夕は風に、ならむとすらむ。
あら鷲の、冬こもりする、うつぼ木も、
あやふきばかり、ふれる雪かな。
大君に、たてまつりたる、身にしあれは、
荒き風にも、あてじとぞ思ふ。

三首位にとゞまり、然も又櫻花を詠じて、

恥しらぬ人に見せばや、時ぞとて、
かろくちり行、山さくら花。

虎にむかひて、

いでたのれ、向はは向へ、逆賊ぎて、
わか佩く太刀の、尻鞘にせむ。

「軍中月」といへるが末尾に、

故郷人かはるばるとゝ、
眞心こめてれくりたる、
うまき伊丹の酒もあり。
看にはこたびのいくさに斬りたりし、
血に染む髏髑五千級。

又「なさけ」とて、

何か書樂をつゆやさも
世は理窟よりなさけぞや。
良人の門出を見おくりて、
歸れといはぬ妻もあり。
我子の戰死を打きゝて、

（批圏點原文に據る）

うれしと祝ふ親もあり。

いざさらば、今は怨の、火むらもて、
世をも人をも、やくよしもがな。

雄壯も是に到つては、熱なきに頭痛の岑々たるを覺えしむ。

渠が長篇（新眞詩）は筆巧流暢自在にして篇皆誦すべし、唯例の輕浮を嫌ふのみ。且つこは慨して世を慨くの詩なるにて、漢詩の翻譯に似たるが故に寧ろ漢詩を讀むに如かざるの思あらしむ。今少し特色を創り出さずんば新眞詩として漢詩に頡頏するの價値なからむ。今渠の詩の作例を示さんに、

矯居偶題

書冊の塵へはらはねど、
仔細に太刀の錆は見る。
よし貧賤に身はたくも、
捨てぬ丈夫の意氣一つ。
去年の夏のこのころよ、
われ韓に官を得て、

謀るところも多かりし、
それも今更夢なれや。
世は慨くまじ徒らに、
ふ吏の怒りを買ふばかり。
詩は廢せむか終にただ、
才子の名のみ殘るらむ。

竹蕭々門を閉ぢ、
窓にはなびく茶の烟。
石落々水を引き、
池にはをどる魚の影。

玄ばし疾をやしなひて、
都にちかき假りずまひ、
こゝも浮世をのがれねば、
猶もくるしむ午の熱。
かへば去年冬の旅、

雪に鳥獣の險こにて、
こゑをけろ虎の聲、
いかに心もさむかりし。

（批圈點原本に據る）

趣味の凡さは渠の特色なり。渠は普通題咏、從軍、慨世、等諸作の外、妓に戯はるゝの詞をつくり、神儒佛の三道を咏じ、小話的叙情詩をつくる。渠又西郷南洲を咏ず、その南洲を評して征韓論の容れざるに由りて反すとなす。更に流俗の見に異ならず。渠は又德富蘇峯氏の西征を送りて曰く。

嵐嶺の、西にもゆかば、いかはかり、
世をねどろかす、君が歌あらむ。

渠は蘇峯氏を觀て以て、一個の歌人と思惟せるならむ。

要するに渠の缺點は眞摯ならざるにあり、浮誇なるにあり、其の亂調主義にあり、詩作に臨んで輕卒なるにあり、渠の詩を作るを量るに筆を把つて卒然書を下して直ちに以て其の言はんと欲する所を言ひ得たりとなし復た沈吟訓鍊することをせざるものに似たり、其集の殆ど三分の二は乃ち書き散しなるなからんか。

是れ渠が短處にして、其長處はその飄逸の氣に乘ずるにあり。眞摯に缺くと雖渠れは以て一派の詩人たるを得べし。渠をして他日其亂調主義を修正し、他日益世路を閲し其の逸氣をして、人情の琴線を透して出でしめば、其風詠する所自から自然の調を得て、其進況今日に倍するものあらん。且く今日の鐵幹を規して、未來の鐵幹をトせんと欲す。

◎明治評論時文記者君

鐵幹が所謂「小生の詩」を輯めたる者なり、新体詩より短歌（寧ろ俳諧歌）の方寧ろ見るべく、短歌よりも序文の方更に見るべし。威嚴めし題字に纏いて、井上博士が事新らしき新体詩の必要論、中村秋香氏が苦しげに東西南北と語をふりまはしたる森鷗外が後來上手になるだらうと云ふ樣な、當りさはりなきれ世辭的新体詩（？）、落合直文氏が教え子を戒むる樣なるかきぶり、さては正太夫が冷語を列べたる、これ等にも尚飽を足らでや恐れ入候自叙までも行列せるは近來になき異彩なり。若し果して綠雨がヒリヽとしたる小序をつまの生羔に比することを得ば、海草も蓴菜も、菊も山葵も、雜然とし て則身皿の半を滿たすの樣は、譬へは賣れ殘こりの鯖棒ぬきにして、つまはあり

丈けおまけ申したる格なるべし。

閑話休題、抑我國に新体詩の名起こりしより、或は法を西洋に取り、或は調を漢詩に借り、洋語を混し漢語を用ひ、總ての實驗を經、總て失敗を重ね、漸くにして少しく成功の曙光を認めし者は獨り羽衣雨江桂月烏山一派の古調と、天遊天來醉茗一派の新調とあるのみ。而して鐵幹此間に立ちて、獨り彼の最も失敗したる最も不調和なる者を執つて、小生の詩なりと稱す、吾人は唯彼の大膽なるを稱し、其無謀なるを憐むと共に、「東西南北」を以て明治新体詩界失敗の歴史として殆んど完全なる參考の資料を備ふる事を認るのみ。

◎日本

鐵幹が短長歌を集めたり、人さまざまの評はあれど、とにもかくにも今代の歌人にして此人丈の吟をなすものは先づあらじ、惜いかな、一種のいやみは字句の間を離れず爲めに往々其良詩まで捨てしめんとするなり但し此人の多情多恨なるさまは此一卷にて十二分に知らるゝなり、其極端なるがやがて面白き詩となれるものなるべし、

◎讀賣新聞

著者鉄幹の短歌と新体詩とを輯めたるもの豪放雄大の氣象辭句の間に現れて面白し只だ惜むべきは優美の趣か缺くる所あるを

◎東京朝日

所謂新派の中に在ても強に善くいへば豪放惡く云へば粉率をもて聞えたる與謝野鐵幹の歌集なり論らへば果しなからめど兎も角も珍らしく心地よきものなり照りもせず降りもせずいと蒸し暑き時むさくろしき下宿屋の二階に寐ころびて此ふみ讀まば忽ちにして雷霆なりはためき驟雨沛然として到る想やすらむ

◎萬朝報

大學一派の新体詩家は平生鐵幹の詩を以て露骨に失すと云ふも露骨とは井上巽軒氏をこそいふべけれ、鐵幹の詩慷慨激切、大に快誦すべし彼の朦朧体なるものと似ず、徐吉潛、趙義淵、井上哲次郎、鷗外、正太夫、他十餘家の序あり、錦上花を添ふるものと云はむ

◎東京新聞

鐵幹頃日書肆に托して、その新體の歌三百を公にす、本書即ち是也。鐵幹は文筆を賣つて世に媚ひ人に諂ひ、以て衣食の計を立つる徒にあらず。故に渠の歌論や渠の歌や、一點の虚飾あるなく、皆渠の本領を見るに足

るとなす。渠は自ら序して「小生の詩は何人を摸倣するにもあらず何人の糟粕を嘗むるものにもあらず小生の詩は即ち小生の詩に御座候ふ」といふが如く、渠の三十一字渠の七五長歌一として新體ならざるもなし。渠の疎放無頓着なる、嘗て字句の末節に齷齪たらざるに拘らず、漢語と國語との調和の如き、混融自在聊か苦思を費さずして自ら其妙を見る。その想と調と毎々陳腐常套に落ちず、又絶えて卑俚纖弱なるものあるなし。從來渠の世の歌讀みと新體詩人なる者とを見ること小兒の如く、口を極めて渠一輩を罵るや三文の價値だもなしと云ふ。今この書を見て、渠へ言ふ所必ず行ふの人なるを知る也。鐵幹既に此才を抱て、しかも詩人として世に立つを屑しとせず、この秋三たび韓山に赴きて、其友と農桑の業に從事せむとす。渠の爲には兎も角、新體詩界のためには惜むべきに非ずや。

◎陽明學

此の書、著者が短歌と、新体詩とを輯めたるもの、雄壯なるあり、纖細なるあり、雅撲なるあり、真率なるあり、頗に因て体同じからず、体に因て調異なるも、而かも概して、想は斬新、調は雄麗、大に時流と撰を異にし、別に一種の風格を立てられたるものゝ如し、

◎高等國文

與謝野鐵幹氏の詩集にて、短歌あり、新体詩あり。氏は、かねて日本の歌の女々しきを概き、極めて雄々しき調をものすべしとて、二三年前二六新報にて、大に氣焔を吐きしゝ人の知るところ。兎も角、議論よりは實行を先きとすべしとて、前年韓山にわたりてよりは、いよ〳〵感慨深く、胸中の鬱結、思はず、詞にあらはれしものもあるべし。自序の略意にいはく、「われ八歳にて鄕里京都を出で、東西馳驅十五年。風塵に沒頭する餘暇、詩歌をつくりて、興を遣り、悶を慰せり。わが詩、幼年より、聊かの草稿を留めざれど、よみ出えの所短歌、七千首以上ならむと思ふ。その記臆に存するものと、この四五年間、新聞雜誌に出したるものとを擇んで、この一卷とはなしぬ。さて、わが詩に、初めて知を辱うしたるは落合直文先生なり。要するに先生の懇懃なる策勵にして無かりせば、今日この一卷を公けにする勇氣の如きも、生せざりしやも知れず、などあり。

◎早稻田文學

「小生へ詩を以て世に立つものにあらず候へども、短歌にもあれ、新體詩にもあれ、世の專門詩人の諸君とは、大に反對の意見を抱き居る者に御坐候ふ。されど、最早議論の時代にあらずと心得候へば、申し述べず

候ふ。世に耿評家多し。小生は、本書に對し、何卒、眞面目なる、詩的批評を賜らむことを、切望致し候ふ」などいへる自序の文、やゝ慢に近き嫌はあれど、抱負見るべし、其の詩風、

平壤府、大同江、
野はひろし、流れは長し。
見れば皆幾月もたゝぬ新戰場。
すさまじきいくさ一と揉み程もなく、
清兵三万わしらせて、
秋は半となりにけり。
よしや今宵は勝利の祝ひ、
かねて三五の月の宴。

の如きは剛健ならんとするもの、

わかむらさきのすり衣
袂ゆたかに裁ちなかど、
君と相る見うれなさは、
この袂にもつゝまれず。
戀よもあらぬ戀ひしさに、
この身のほども打わすれ、

れもはず君のうなろ影
なばしと言ひて留めなよ。
暁の緒手卷くりかへし、
むかし語れはいと長し。
酒あたゝめてこの一と夜、
むかなる語にあかさはや。

などは優美ならんとするものなるべし。短歌にても、

わが駒も一こゑ鳴きぬ。高嶺より、
櫻ふきまく山れろなの風。

の如きは誦すべきもの、

いでれのれ向はば向へ。逆剃ぎて、
わが佩く太刀の尻鞘にせむ。

の如きは寄に馳せたるものと云ふべし、著者鐵幹は、ともかくも我が新体詩檀に一旗幟を樹つるもの、吾人ハ此の書を歡迎すへし。

◎山陽新報　鉄幹與謝野寛氏の歌集なり氏の歌は長短共に一家の風骨を備へ紛々たる今の新体詩若しくは軟柔なる和歌界ゟ一頭地を放出す此篇以て氏が技倆の一斑を知るに足る

◎防長新聞　是れ與謝野鐵幹の歌詩を編輯せるものなり古人を出でて古格に入り新語を用ゐて新調を爲さす逸氣躍如として而かも大雄萬葉の意を失はす著者若し我が歌詩は鐵幹一家の歌詩なりと謂はゞ自ら知るの明なきものなり這般有韻の天語は私人の獨占するを許さゞるなり人丸赤人の歌は即ち李白杜甫の詩なることを知るものは鐵幹をして自ら此の歌詩は小生の歌詩なりと謂はしめざるべし鐵幹が自ら小生の歌詩なりと云ふもの是れ謙辭のみ若し疑ふものあらは之を東西南北に問へよ

◎藝備日日　むかし山中なにがしは其辭世に「わんざくれふんするべいか今日ばかり明日は烏がかつかぢるべい」と云ふ歌をものしき又さる人の僕が主人と共に割腹する時「死ともなあゝ死ともなさりとては君がなさけの今ハ恨めし」など詠いでたるもありけり人は兎もあれ我等は尤も斯る自然の調になりし歌（詩も亦然り）を好む、もとより或る場合には推敲鍛錬など云ふ事も必要ならざるにあらざれども一首の歌をよみいづるに半日もしくは一日も頭を惱し徒に思ひを造句に凝すが如きはそも〳〵歌よむ本意にかなへりとは謂へからず在のまゝに思ふ事を言あらはしてこそ歌よむとはいふべきなれ然れば解し難き古語〳〵しかも限りある古語を以て此日進開明の世の萬象をいひあらはさんとする頑陋迂僻の徒は我等の排斥せんとする所なる事言ふまでもなし今鐵幹與謝野寛氏は作歌といふことに付て稍かけはなれたる意見を持てる人と覺しく其歌を見るに又頗る面白き節あり此度淺香社中の人其歌集を印行し題して東西南北と言ふ尋常の者ならんにはなにがし家集とか何々歌集とか云ふべきを斯く名けたるにてもはや其歌の奇想天外より落つ底のものなることを知られていと興ある様おぼゆるなり特に其歌は故らに歌つくらんとて詠出たるにはあらで氏が東去西來、或は塵を逐ふて奔り或は涙を灑つて行くとき〴〵折にふれて口ずさみしものならずは其世を慨き時を憤ほる

熱腸より溢れ出でたるものなり今試みに其一二を示さん

口あきてたゝ笑はゝや我とちの
泣きて甲斐あるこの世ならねは

風流男の名たゝ恥ちゑを歌詠て
世にほこる身といつなりにけむ

世の人の衣の眠りをれとろかす
あらゑもかなとれもふころかな

又たゞ櫻花を詠みいでたる歌にても作意ことなりて而白し

あち鶯のつはさや觸れゑ高嶺より
枝なから散るやまざくらはな

その調率ね此の如ゑ想ふに頑陋迂僻にゑて小心なる歌人はこれを讀みてアッと驚くゝゑ然れど我等は著者に向つて感謝せん何となれは將來作歌の進歩は著者其人の如き改進的歌人によりて成るべけれはなりさらはとて取敢ずかくなん

ひかゑ西南や北の諸人よ
ねふりをさませ此書をみて

◎佐賀自由

短歌と新體詩とを輯めたる者之を東西南北と云ふ著者は詩界就中新體詩に於て凡俗詩人と一種異なれる理想と眼識とを有し新體詩界の革命者とゑて人に尊重さる、鐵幹與謝野寛氏也氏の目的は主とゑて窮風なる古格を排ゑて新體詩格を創成せんとするに在り自序に曰く小生の詩は小生の詩なり世駄評家多ゑ小生ハ本書に對ゑ眞面目なる詩的批評を賜はらんとを欲すと其抱負既に凡俗者流に異なるを見る今試に篇中一二に就て評せん乎豪快なる者子規君を訪て從軍行等あり悲壯なる者祭南洲黑門朱染亭將軍不跨の諸篇あり婉曲なる者若紫宮妓白梅あり之を要するに著者は長篇に於て成効せるも短歌に於ては少しく奇骨に過る厭あるか如し蓋し短歌ハ句數限あり豪懷以て遺らんは容易の業にあらす非邪

◎「日本」時文評家白雲君

東西南北とは鐵幹が國詩を集めゑ者也、詩の形の末だ調はざる者無きに非らすと雖も詩想潑々愷かに從來沈滯せる國詩界は向つて一頭地を拔き得たりと爲すに足るなり、國民の友は其乱調なるを咎め漫に古格を破る者とゑて之を憂ふと雖も、余は寧ろ此種の吟咏をして益々多出せゑめん事を祈るなり、蓋ゑ從來の狹隘偏風なる歌界を打破ゑ所謂眞の國詩界を

建設せんには必らず多少の荒療治を要すると猶恰も一國革命の際に當りて多少の騷亂を免れ難きと同じければなり

◎同上白雲君又云

詩美の眞價を論ずるに其作詩家の人物を見て漫りに之を上下せんとするは固より論ずるに足らず、然れども坊主が惜けりや袈裟迄惜さは人情なり、詩人たる者此點に於ても多少の用意無かる可らず、余は東西南北の著者に告ぐ可き、兄にして若き能く謙讓の意を用ゐ其傲慢ちなる其如何にもキザちなる豪傑振る所を隱すを得たりとならんには、東西南北は必らず倍數の好評者を迎へんならん、惜いかな兄は此點に於て其詩の眞價の幾分を下落せしめられたる也、誤る勿れ余は決して詩を賣らんが爲め故らに世人に媚びよと云ふには非ず

◎國學院雜誌

鐵幹の新體詩につきては前號にも一言せり。この「東西南北」に接するに及びて、吾人鐵幹の眉目に接するが如き感あるなり。何となれば其の歌の極めて實にして、眞面目を吐露するを以てなり。「鐵幹歌を作らず。しかも鐵幹が口を衝いて發するもの皆歌をなす。」と子規子の序せるは甚その要を得たり。露骨なりとの評を受くるは故なきにあらず。今その新體詩と短歌とを比較するに、新體詩に劣にして短歌に優なるは世既に定論あるが如し。故に吾人はこゝにハ專その短歌を評せんと欲す。露骨にして神韻なきは短歌に於ても亦免れざる所、然れどもその斬新奇拔にして、而も眞摯なる所に至りてハ、鐵幹も亦一派の詩人なるかな。

擬從軍作二首

野を行けば朝露をよしすたれたるあだのとりせに月なほ殘る
日はくれて時雨ハ雪になりにけりとりでハ遠き駒はなつみぬ

咸鏡道にて

尾上にはいたくも虎のほゆるかな夕は風にならむとすらむ
立見將軍の臺灣に赴かるゝを送る
むら雨の露ちる椰子の下かげに鎧ほす夜や涼しかるらむ

天祐俠

いなづまの光も見えて一むらの横ぎる雲よ雷なりわたる

軍中月

まずらをの行くべき道にまどはねばこころぬありあけの月

その境遇の然らゑむる所なるへけれと、韓山遠征中の作、殊に雄壯なるを覺ゆ。

雄壯にして而も優美なる作を擧ぐれは、

櫻花十種の中

ひく汐に櫻ちりうくたぼろ夜ハ龍の都も春やゑるらむ

わが駒も一聲なきぬ高ねより櫻ふき捲く山れろゑの風

あら鷲のつばさやふれゑ高ねより枝ながらちる山櫻花

嵯峨の花見に行きて途上雨にあふ

働きかへす牛の背白し雨まじり櫻ふきれろす山おろゑの風

梅

えひらにもさゝばさすへき花なるを酒に浮べて見る世なりけり

春雨

塗鞘の中さへゑめる春雨に太刀の刃口も花の香ぞする

海上月

いくたびかまどかになりて碎くらむ鳴門の海の秋の夜の月

是等はいづれもその得意の作なるへゑ。又艶麗典雅なるものを擧ぐれば

櫻花十首の中

姫君の琴の音やみて高殿は花のふゞきになりにけるかな

月ひとつ堤に花のかげ多し笛ふく人ハ舟にやあるらむ

春雨

高殿は柳の末にほの見えてけぶりに似たる春雨のふる

當時和歌の格調斬新にゑて他と異なるものハ、佐々木信綱氏とこの鐵幹となるへゑ。而ゑて一ハ優麗にゑてれのゴから歌人の歌なり。一ハ朴訥にゑてさながら武人の吟なり。その本領各異なれども吾人甚之を喜ぶ。二氏なるものをたつとむべきなり。

◎日本人

今の世に歌ありやと云ふ者あらば心ならずも「東西南北」を示さん。今の世に新体詩ありやと言ふ者あらば心ならずも「東西南北」を示さん。著者鐵幹は自ら文學者を以て居らざる者其者の著を以て濕文界の啓明と目することを寧ろ文學の恥辱なり。然れども吾人は之に勝る者を見ざる間は「東西南北」を以て

好となさゞるを得ず。著者は言語音調の上に一種の妙處を有せり。殊に豪壯なる感を起さしむるに適當なる調子を善くせり。其例

咸鏡道を旅行して雪中に虎の吼ゆるをきくこと三回

いでれのれ向はば向へ逆剝ぎてわが偶く太刀の尻鞘にせむ

咸鏡道の千佛山にて

尾上にはいたくも虎の吼ゆるかな夕は風にならむとすらむ

放魚

盆池三尺水淺し。汝が身を置くに足らざらむ。行けよ行け今放つ。(略)

咸鏡道の山中偶ま舊友某と遇ふ。(略)

痛飲三斗この一夜、未だ醉はずと笑ひつゝ、ふたり砂上にねころんで、古詩歌ひしも昔なり。(略)虎は防がば防ぐべし、北夷の害は如何にせむ。萬馬あしたは南下せば、八道みな血とならむ。

將軍不誇

大勝利大勝利、快電夜到る大本營。みさぶらひとく燈火をたてまつれ、我君したしく見そなはす。」御代長月の十五日我軍四方より押し寄せつ、敵を重圍

[illegible]の中にして、はげしきいくさ打ちつゞけ、其日も暮れて其よるの、いざよひの月落つる頃、平壤の城はねとしけり。」(略)

此等の外「某伯爵の讌宴に題す」「太郎」といへる者の如きは其意匠文學的の趣味に富めども其他文學的ならずして單に著者の境遇を詠じたる者少からず。是れ著者の文學者を以て居らざるに因るなり(越智歳之助)

◎神士教報

現今の文壇、新体詩人と我れも名乘り、人もゆるせるもの少なからず。然れども、その詩たるや、皆な陳腐よして、一句だも誦するに足るものなきは、心ある人々の齊しく嘆ずる所、この際圖らずも、一大詩人は、山水明媚の舊都より躍出せり。その人を誰とかなす。鐵幹與謝野寛君その人也。今試みに氏が詩集なる「東西南北」を繙き見るに、短歌にもあれ、將た新体詩にもあれその思想、その語調、皆一として斬新奇拔ならぬはなし。殊に漢語と和語との調和の如きは頗る圓滑にして、恰も盤上に玉をころがすが如し。舊都の山水も、君が如き一大詩人を得て、近頃の滿足はいかに。吾人は、この「東西南北」を世の常人達に見せむよりは、現今の自稱新体詩人先生達に見せたし。

◎反省雑誌

新體詩作家の中堂に一顆地を抽んでたる鐵幹氏が、ここ四五年の間に新聞雑誌に現はれたるものを、氏が記憶に存せるものを擇んで一卷となし名けて「東西南北」と云ふ、收るところ短歌、新體詩幾百種、彼自ら吹聽するが如く誰を崇拜するにもあらず、誰の糟粕を嘗るにもあらず、自ら清新愛すべき一個の鐵幹調をなす、讀者は定めて本誌上に征號掲載せる氏が短歌に就て其一班を知らん、氏の歌は概ね口を衝て出でたるものを直ちに手記せるに似たり、些の鍛練彫琢を經ず、且つ多くの漢詩口調あり、稱して之を漢三和七の新體詩と云ふべきか、此の如きの詩は之を貶するものは皆云はんとす、餘りに露骨なり、餘りに生硬なり、蕪雜なり、亂調なり、不規律なり、輕浮なりと、褒むるものは云ふ清新愛すべし、壯快喜ぶべし、氣拔なり、逸宕なり、雄大なり、天眞なり、自然なりと、兎に角我國の新體詩界未だ李杜出でざるの時、氏が如きは詩界革命の一先鋒たるに於て餘りありと云ふべし、只漢詩の所謂る竹枝體香匣體にカブレて歌妓に關係あるの詩あると、及びイヤニ東洋流豪傑を氣取れる諸篇の如きは、新體詩作家として今後の世界に成功し得るの要素にあらざるべし、此集兪吉濬、趙義淵二氏の題辭あり、序文には井上哲次郎落合直文森鷗外小中村義象坂正臣子規子正直正太夫荷屋佐々木信綱の諸氏あり、之を罵むるの文と之を毀るの文と共に之を掲ぐ、大に面白し、體裁又佳し、蓋し午熱燒くが如きの時南窓の一枕閑かに此書を繙かば乍涼忽ち腋下に生ずるの興味あらん

◎東京日日

東西南北の鐵幹與謝野寛氏の歌集なり、鐵幹元來豪氣を以て勝る、況んや孤劍飄然韓山三千里を跋渉し句愈〻豪を加ふ、長篇の如きの殊に壯快を覺ゆ。

◎世界之日本

洒々たる表裝、二百余頁の小本、收むる處の短歌、新体詩、三百余篇、子規子曰く「鐵幹歌を作らず、しかも鐵幹が口を衝て發するもの皆歌を爲す」と、本篇は皆此調子を以て遣るものなり、本書の題字、序文實に拾有二、自序に曰く「世に歌評家多し。小生は本書に對し、何卒眞面目なる、詩的批評を賜はらむことを切望致さ候ふ」と、兎に角、此の如き詩を作るもの、當今鐵幹一人のみ。

◎少年文集

東西南北一部、鐵幹が近著に係る。彼が短歌と新体詩とを集めたる小册子にして、彼が世に公にせる初度の詩集なり。予謹讀んで其氣慨あ

るを惜みし、壯語放言絶えて女子の体なきを喜ぶ。其弊は語粗にして意渾きに在り。彼は稍壯快の趣を得て、未だ雄大壯麗の域に到らず、徒に奇氣を吐かむとして壯語を弄せしとして毫も詩趣なきものなきにあらず。慨慨沈痛、壯士劍を把て舞ふの概あり、而かも、雲井龍雄の語と意氣相似るものあり。慨慨餘りありて詩情足らず、造語の毫壯を求めて往々詩的ならず。同じ慨慨的の詩なるも、雲井龍雄の作よりは、藤田東湖の作が詩らしく、藤田東湖の作よりも星巖がよく、山陽がよく、陸劍南がよく、杜少陵がよし。鐵幹は、雲井に似て未だ至らず、況んや東湖以上をや。唯予輩は纖柔なる今の新体詩壇に、鐵幹の如き稍男らしき作家の現はれたるを喜ぶ、今の新体詩人は多くの優男なり、其文字や纖麗、其意氣や柔弱、氣骨なく、熱血なく、足、都門の外に出てず、綺席盞書の間に出入して一身の小感情を謠ふに過きず、予輩未だ鐵幹の人となりを知らざれども、一劍萬里、朝鮮に遊ぶこと二回、バイロンが古羅馬に遊ひしと境遇稍似たるものあり、日暮れて菊谷虎嘯くの處、殘燈影暗くして美人劍を撫して泣くの時、彼が胸中無一里の感慨あり、亡なるの際、彼が詩想自から躍動せしならむ。彼が詩は、書より得來らずして、實地より得來れり。

故に粗笨なるも、なほ生色あり、病婦が白粉を傳くるの態なくして、壯士が劍舞するが如し。鐵幹たるもの、此氣象を失はずして、淺きもの深くなり、粗なるもの精となり、豪快と共に優美をも兼ね、想も詭も散文的を避けて詩的となれば、大に觀るべきものあらむ、新体詩よりは、寧ろ短歌をよしとす、淸新粗豪、自から体をなす、蓋し萩の舍の才氣を學びて、海上胤平氏が遒勁の体を得たるもの乎。其新体詩は短歌に比して、淺く拙きと、更に甚し、然れども、これ年壯氣銳なるものゝ免れざる所、われ、鐵幹の進境あるを疑はず、其詩の第二集第三集世に出づるの時は、最早今日の鐵幹にはあらざるべし。

◎東洋哲學記者念力生君

今日の新體詩家と自ら稱するか若くは人より稱せらるゝかするもの、(井上博士、外山博士、上田文學士等の暫く措きて)赤門派に雨江、挂月、醒雪、烏山、羽衣等の若連中あり。此れらの中にも各得失長短はあれど、此の一派の詩は概して形、艶麗を失して實、孱弱なり。務めて古言死語を用ひて字句の雕鐫にのみ注意すれば、一首全体より見て往々竹木的結果をなす。最も詩の本意に背くところ。

又民友社派、即ち湖處子派とも云ふべきものあり。こは、主に西洋思想を眞似出せ、吾が詞藻にハ注意を欠くもの、如し。されは假令往々其の思想に於て多少面白きものあるも一讀同情をひくこと少きを憾とす。即ち實に於ては稍取るべきところあるも、形ハ實に見るに堪へざるものなり。

早稻田派に天遊天來等あり。是れ湖處子派と相伯仲するもの。文學界派の藤村の如きも亦大同小異。何れもあまり響めたものにはあらず。佐々木派に至りては、形質共に平凡、少年世界毎號掲ぐる所の作、その一斑を知るべし。

以上は、皆、當世の新躰詩家と自らし思ひ、又多少の人もまた稱せるものなり。而かも皆專門と稱せるものなり。而して人は尚ほ、此の外にも一の見逃すべからざる新躰詩家あることを知らん。即ち與謝野鐵幹が一流是れなり。

而して、鐵幹と他の詩家との異るところを云へば、他の詩家は、何れも專門家なれど、鐵幹は前年來朝鮮に在りて官吏となり策士となり今や又彼國の農夫兼商人となれる者なり。彼ハ專門詩人にあらず、故に其の詩は、往々世人の爲めに冷視せらる。專門家として必ずしも詩作に巧なりといふべからざると同時に、專門家にあらずとて強ちに詩に妙ならずといふべからず。即ち專門家の作以外にも優に秀でたる詩なきにあらざるなり。

又世の新躰詩家と稱し、若くは稱せらる、ものの詩は、多くは七五調に限れるが鐵幹は實に三十一文字の新躰を作れるものの主張せるもの、是れ蓋し鐵幹を以て嚆矢とせん。誰れかその功を爭ふものぞ。鐵幹が詩の特色一ハこゝにあり。

鐵幹が詩は、世間を歌ひたるものより、寧ろ自身を歌ひたるもの多し。是れ古今の題詠的詩人即ち普通詩人と異るところなり。故に鐵幹が詩は鐵幹が素養と閲歴とを知れるものならでハ、或は同情なひくこと少からん。

鐵幹は幼時以來幾多の艱難を經て多くの閲歴を有せり。彼ハ貧賤よ處して旅行を喜び、この十五年間我國の東西南北殆ど其足跡を印せざるの地なく、又宗教、漢學等の素養あれば、その詩自ら實情に迫り、彼の淡泊無味、徒らに外面を裝ふ題詠的浮華の作と日を同うしては論ずべからざるなり。

世の鐵幹を誤れるもの、否鐵幹が詩の由來を知らざるもの、往々異風の作を怪んで鐵幹調など戲る。素より鐵幹の詩の鐵幹調ともいふべきところなきにあらず。

然れども鐵幹は徒らに異調を弄ぶものにあらず。鐵幹は夙に萬葉調をも學び又嘗て古今調をも試み、遂に明治の大思想は、なか〳〵それ等膠漆的古調にてハ云ひ

表はすべからざるを悟りて、さては、一流の新躰調を研究し出でたるなりと云ふ。鐵幹は吾が詩界の革命者なり、革命の際多少の血を見るは免れざるところ、鐵幹が亂調は革命の血なり寧ろ喜ぶべきものか。

併せこの血、此の亂調は鐵幹にして始めて可なり。此の素養、此の閲歴あるものにして始めて許すべき。彼の僅ゑ二三年以來國語國詩の研究を始めたる若連中にして、若し誤て鐵幹調など思ひて亂調を用ふることあらば、それこそ小兒の劍を弄ぶに同じく、人を誤らざるまでも、必す自ら傷くべし。戒めざるべけんや。

又鐵幹の詩を評して、鐵幹は勇壯の調に長けたりと云へるもの多かるが、予輩の見るところを以てすれば、寧ろ、消極的に、鐵幹は艶麗なる女々しき詩に短なりといふの適當なるを覺ゆ。即ち鐵幹は其の性質、其の氣象、其の素養其の閲歴よりして、勇壯活潑、さも丈夫的ならざる詩、即ち優美艶麗いかにも女子然たる詩を作ることに短拙なり。即ち婦人に向ても泣て慰むるより、笑うて勵ますの風あり。是れ鐵幹の鐵幹たるところ、其の詩の基くところなり。

「東西南北」は鐵幹が舊作の一部分、正に其の素養其の閲歴及び其の性質氣象の一端を見るべし。否否其の詩の實躰比價を知るべし。徒らに或る一部のみを見聞し思ひ誤りて之れを冷視するハ著者に對して不親切のみならず吾が文學へ對して冷淡なりといはざるべからず。近刊「日本人」の如きは比較的に鐵幹を知り、併せて其の詩の價値を知れるものか。予輩漫りに鐵幹を辯護するものにあらず、世の文學者批評家と稱するもの、文學ゑかも新創の詩歌に對して冷淡不親切なるを怪ゑむのみ。又戒しむるのみ。批評は智識的公論にして、感情的私說なるべからざるを歌ふるのみ、かの女子的妬心より是非する者の如きは固より言ふに足らざる也。

◎青年文

「東西南北」ハ與謝野鐵幹氏の短歌と新躰詩とを集めたるもの前に外山氏一派の「新躰詩歌集」出で、今また此書出でしは、以て新躰詩が次第に文壇に地歩を占め得て、將來大に發達せんとする趨勢を卜するに足るべく、此點より視て、吾人は先づ其出現を歡迎するなり。而も猶ほ片々たる小册子、十名にの敘文題詞を添へたるは寧ろ露々しからずや。さはいへ、これ非難すべきこと家非ず、吾人は著者がかくも多くの知己を名家の中に有することを賀するもの。作其者につきては、吾人ハ忌憚なく嘗て言ひし所を反覆せん。曰く、詩想單純淺薄にして、其言表はしは露骨なりと。鐵幹氏の詩想はいまだ幼稚にして單純なり、

深奥複雜なる哲學思想は彼れに乏しき所、幼稚單純なる詩想は寧ろ短歌に適す。「東西南北」に於て長篇の新体詩よりは短歌に採るべきもの多きはこれが故なるべし。げに鐵幹氏の短歌には愛すべきものあり。左に例として掲ぐるもの〻如き清新喜ぶべし。

野に生ふる草にも物を言はせはや、
涙もあらむ歌もあるらむ。

乞兒らが着すてし野邊の朽ちむしろ、
朽ち目よりさへさくすみれかな。

而も吾人は鐵幹氏の短歌に悉く此賛辭を許す能はず、そは其多くは前人既に歌にしたる平凡普通の想を多少詞と趣とを變へたるものに過ぎざればなり。例證を擧ぐるまでもなし、全篇を通じて吾人は舊知の想に邂逅すること頻繁なり。彼は又豪壯雄大を歌ひ、頻に虎、太刀、鷲、血等の詞を用ふれども、その想寧ろ淺薄にして徒に外見のみを飾り、七ツ道具を揮廻はす影辨慶たるを免れず。新体詩に至りては淺薄露骨更に甚しく、誦すべきの作殆とあるなし。吾人はかく鐵幹氏の作にいまだ滿足する能はざることを表白すると共に、氏が新体詩の發達に大切なる貢獻をなしたる一大功を看過すべきにあらず。其貢獻とは何ぞや。曰く、氏が漢語を新体詩中に導き入れたること是なり。從來此事を試みたる作家は甚だ少しとせず。されど氏の如く巧に雅語と漢語とを融和し得て、毫も其調を亂すことなきのみか、却てこれを圓轉流暢ならしめ、變化あらしめ、雄壯ならしめたる者はなし。氏が作は新体詩中に自在に漢語を使用し得ることを示したる嚆矢にして又模範なり。用語の乏しきは由來新体詩の大患なりき、氏が漢詩を導き入れて此患を除き得ることを實際に示したるの功豈沒すべけんや。

◎帝國文學（詩友大町桂月君）

老人の繰言よりは、小兒のかた言が詩的也すべて、幼遲なるものは可愛し。犬も老犬よりも、小犬が可愛く、蛙も足の出來たてが可愛く、人も十二三の少年が可愛く、すれッからしよりおぼこが可愛らしきは、なべての人情なるべし、東西南北一部、われ其老人のくり言に似るもの〻なくして、小兒の片言に類するもの〻多きを喜ぶ。鐵幹、万葉集を淨寫することと二回と自から記せるを見れば、好んで万葉集を讀みしを、知るべし。蓋し万葉集の歌は、多く小兒の片言に似たり。万葉集の長所は、其幼稚なる處に存し、短所

も亦茲に存す。鐵幹は万葉集の長所を學びまた其短所をも學べり。

万葉集の歌、古今集以後の歌に比すれば、稍雄壯の音を帶ぶと雖も、漢詩の沈痛なるに比すれば、言ふよ足らず。要するに、万葉集は幼遲ながらも、雄壯、優美、滯禮の三分子を含めるものなり、古今集以後の和歌は、唯其優美の分子のみを傳へ、いよ〳〵發達して、愈柔弱に陷れり、優美巧緻の點は、万葉集よりは古今集古今集よりは新古今集の方が發達せること、言を待たず。されど其柔軟にして力なきを如何にせむ。鎌倉時代に於ける實朝、德川時代に於ける眞淵、明治時代に於ける海上胤平氏の如きは、時弊に鑑みて、遒勁なる万葉の古姿にかへさむとつとめたる人也。これ亦一見識也。唯雄壯を尚ぶの餘、古今集以來、折角發達し來りたる優美の分子を全く閑却し去るは、策の得たるものと云ふべからず。鐵幹は萩の舍主人に學ぶと雖も、寧ろ海上氏に得る所あるが如し。緋威の鎧をつけて太刀佩きて見ばやとぞ思ふ山櫻花」とれ粗豪の語を陳ねて強ひて蒼古を街はんとせるものにして、眞情より滿きたる詩にもあらねば、また、萩の舍主人が平生の格調にもあらず。鐵幹は萩の舍主人の才調よりも、寧ろ海上氏の古調を學べり、否、万葉の格調を學べり。

詩三百、一言之を掩へば、曰く、思邪なきとは、孔丘の語なるが、東西南北一部、長短詩三百、われ〻之を評して曰はんとす、語粗にして意淺と。こは其大眼の觀察也。されど、取るべき所なきにあらず、雄壯らしきと、其一也。活氣あること、其二也。陳腐を避けて清新を求むること、其三也。題咏の弊を避けて活感情を歌ふと、其四也。此丈けの取柄あれば、年少の詩人として多とするに足る。其語粗意淺の如きは、年と共に努めて止まずんば、自から之を去るを得べし。余は此を以て年少詩人を累はさんとするものにあらず。

万葉集は短歌よりは長歌遙にまされり。万葉の長歌は、前後比なく、我國の詩壇に卓立す。鐵幹は其長歌は學はずして、多く短歌の格調を學べり。東西南北に在りて、長歌よりは短歌なほ見るべき節あり。今短歌の中にて、詩想の最も掬すべきものを求むれば、

乞兒等が着すてし野邊の朽ちむしろ
くち日よりさへ咲くすみれかな

纖警に近けれど、詩的たるを失はず。長詩の中にては、

上人老いぬ我れ病みぬ、

世をかたらふも懶しや。
たゞ相逢うて笑ふのみ、
興去れば又別れ去る。

此一篇最も喜ふべし。因過竹院與僧話、又得浮生半日閑」よりも更に奇拔にして風逸の趣掬すべし。われ東西南北を讀んで感服したるは以上の長歌二篇也。

ひく汐にさくらちり浮くおぼろ夜は
龍のみやこも春やしるらむ
富士の山のぼりもはてぬしら雲は
麓の峯のさくらなりけり
あゆめよと教へし親にさきだちて
死出の山坂いかに越ゆらむ
うまや路の川ぞひ柳ひと葉こぼれ
ふた葉とぼれて日はくれにけり

着想みな悉く斬新とはせされども、なほ東西南北集中の佳調たるを失はず。彼の恥しらぬ人に見せばや時ぞとて

かろくちり行く山ざくら花
夕かぜに尾花の袖はまねけども
暮れゆく秋はとまらざるらむ
吹く風をうらむ色なく散りにけり
花のこゝろは我も及ばず

など、暴露淺腐にして毫も詩趣なき諸什とは、同日に論すべくもあらず。されど世をいる鼎もあらば烹て嘗めむ
甘き舌のみ多きころかな
泡ふきて横さまわしる蟹の子も
世をいきどほる友にやあらむ
いざゆきてそこに住まばや山かけの
松のあらしは人をそしらず

の如きは露骨粗笨なるが中にも痛切なる少年の感慨見えて、奇拔の趣なきにあらず。

斷髮嶺にかゝりしに、

郡吏追ひ來て我に云ふ。

これよりさきは虎多し、

夜ゆくことを戒めよ。
虎はふせがばふせくべし、
北夷の害は如何にせむ。
万馬あしたに南下せば、
八道みな血とならむ

これ鐵幹が獨壇の調子なるべし。

新体詩の調を七五もしくは五七以外に求めて、稍面白きものあり。即ち、

花はくれなゐ酒はうまし。
物のなさけは我も知る。
千兩万兩つまはとて、
かろくは許さぬ男七尺、
君のおんためと聞くからに、
いざ率り申し候ふ。

この胸に万卷の書は藏めねど
この腕に三尺の劍は覺えあり
來れ五百の我がとも、
支那四百州、土足にかけむ。

此詩の末二句、折角の好詩を瓦礫にするの恐あれは、われわざと略して茲には引用せず。斬新奇拔の點に於て、やゝ奇たる所なしとせず。鐵幹はまた俗語をも漢語をも調和せむと努め、時に漢の句より脫化し來るものも少なからず。若紫は明治の琵琶行なるべく、「戸の雪は我ぞはらはむほだくべて夕の酒は君ぬたゝめよ」は「柴扉曉出霜如雪、君汲泉流我捨薪」の出來損ひなるべし。「ますら猛夫の志、腰なる太刀や知るならむ」は「少年心事劍相知」より脫化し、「いねとある此文もなほ君の手を思へは中々裂かれざりけり」は「猶是貫人所手寫、十襲帶來離婚書」より脫化し、「肴にはこたびのいくさに斬りたりし、血に染む髑髏五千級」は「歸來笑問有酒否、血髑髏是好下物」より脫化し來れるが如し。從來の歌人は比して豪壯の語氣あるも亦怪しむに足らず。われは文に、詩に、雄壯を喜び、華麗を喜ぶ沈痛を喜び、悲慨を喜ぶ、然れどもわざと壯快の言を放て奇拔を衒ふを好まず、

鬼面人を威すは、真士の爲さゞる所、空威張は匹夫の事なり。威あつて猛からざるを尙ふが如く、詩も徒に子々たらざるべし。鐵幹志を吐けは、太刀と云ひ、朝鮮にて歌を作れは虎を舁ぎ出すなど、頗る奇を過ぎて、匹夫の勇に似たり。くどくどしけれど、其二三例を示さは

おなし道、おなし眞ごゝろ二人して
いざ太刀取らむいざ筆とらむ

韓山に秋かぜたつや太刀なでゝ
われ思ふこと無きにしもあらず

よき敵は夢にも入らずあはれわが
枕刀よなにまもるらむ

韓山としていかでか死なむあだに死なば
家の寶の太刀そ泣くべき

風にまかする浮雲の、輕き姿よ劍一つ
ますらをの腰にまもりの太刀はあれど
人のなさけをいかにたつべき

塗箱の中さへしめる春雨に
太刀の刃口も花の香ぞする

世を思ふ心はひとつ太刀なでて
泣く友もあり笑む友もあり

いたづらに何をかいはむ事はたゞ
此太刀にあり。たゞ此太刀に

太刀なでゝわが泣くさまをわもしろと
歌ひし少女いづちゆきけむ

折れたる腰の錆び刀、支那の血汐の痕存し
丈夫悲憤にあまりては、たゞ三尺の劍を撫す

筆とりてあらはゝるへきおのが身を
太刀にかへてと何れもひけむ

かくまで太刀を讀み込まざれば男らしき歌は出來ぬものにや。
雪に鳥嶺の險越えて一聲聞ける虎の聲
小ち山に吼ゆてふ虎の聲はきかず

さびしさ秋の風たちにけり

吼ゆといふ虎こそ狩らめむら鳥の

さわぐ小鳥はあさらすもがな

夜のあくる待ちて山路はゆけよかし

こよひはいたく虎のほゆるに

歌千首かきて藏めしから山を

また行くまでは虎やもるらむ

山けはし駒の足にそし行には

竹の葉そよき虎吼えむとす

尾上にはいたくも虎の吼ゆるかな

夕は風にならむとすらむ

いでれのれ向はゞ向へ逆剝ぎて

わがはく太刀の尻鞘にせむ

鐵幹が朝鮮にて作る所の歌、ほとんど虎を讀まざるはなし借問す、朝鮮には、虎と人といづれが多く住へる。素藻嗚尊むかし經營したまひし處、豐太閤近く征伐

せし地、子の爲に虎を屠りし勇士、國の爲に夫を刺し、烈婦など我國人の遺跡は多く半亡國の山河、滿目蒼涼、詩腸を刺擊するもの多かるべきに、虎よりもそゝと詩趣らしき題目は捉ふることを得ざる乎。われは東西南北を讀んで、鐵幹が氣概ある男子なるを知る。殊に少年の客氣多きを知る。洵に可愛らしき男也。鐵幹自から其抱負を歌うて曰く、

韓にして、いかでか死なむわれ死なば

をのこの歌ぞまた廢れなむ

男子の氣を以て、自から期す。これ實に嘉ずべし。されど、えらさうなる語氣のみが男子の歌にはあらず。鐵幹の才、何ぞ更に數歩を進めて大歌人の歌を作らむとはせざる。鐵幹、壯士的の口氣ありて、詩人的の狂熱に乏しく、用語粗豪にして、未た大家の風度を見ず。幸に斯文の爲に之を努めよや。

われ今の詩人と號するものを見るに、血なく、涙なく、骨なく、腸なし。彼等は唯機械的に美文字を陳列するのみ。滿腔の至誠より迸り出でたる活詩を作ることを得ず彼等は多く女子にして男子の皮を被れるものなり。彼等は國家の何物たるを知らず、社會に向ひて毫も同情なし、紅樓綺席の間には出沒するも、足、都門の地を蹈

ます。歌人、和文家間ふり云ふに足らず、漢詩人も墮落せり。新体詩人もまた狂熱風骨の世を動かずものあらず。小説家は猶更下等なり。此際匹方り、鐵幹、好んで慷慨雄壯の語を吐き、孤劍万里、飄然として二たび古三韓の山河を跋渉す。頗るバイロンが慨然として古希臘に遊びしよ彷彿たるものあり。而してこの好男子、竟にバイロンが狂熱の詩なき乎。

終に臨みて一言すべきとあり。屬者、鐵幹、余に書を寄せて曰く、(前略) 小生は世の寶文連中に伍するかイヤさに、近々三度の渡韓を致す準備中に有之、其内一度御目に懸り、れ話も申上度候。東西南北の四十四ページに、門に立ちて云云の歌あり。これは、我兄の作なるべきよし、金子雄太郎氏より申越さる。はなしをきけばなるほど我兄の作なるへし。されど小生には今迄、小生の作なりと思ひ込み他人にも書いて呉れたると屢あり。淺香社當時の歌人中街に槐園と共に敬服し居たるは我兄なりし故、當時おもしろく感じたりしまゝ、記臆して、遂には我ものにしたるものか。小生は從來の放埒、頓と草稿なんかを留めず、此度の此册子も友人から新聞や雜誌の切り抜きを借り集め、夫れに自分の記臆せるものを加へて纔に三百首を選び申し候。跡から考へて見れば拔きたかりしもの、又入れたりかしものなどさま〳〵氣づきたれど、詮方なし。何れ我兄の作と心付きて見れば再版の節、省き申すへし。御批評中にまちがひて這入りし事をも斷り被下度願上候(下略)と。想ふに數年前淺香社の歌合の兼題に作りしものなり。われ短歌を後昆に傳ふるの意なし。拙詠若し氣に入るものあらば、何時にても、熨斗つけて進上せむさるにても鐵幹は正直過ぎたる男哉。われは所謂山かげの松の嵐にあられは、人を褒めもすれは罵りもするなり。鐵幹恕せよ。

◎太陽(新刊案内)

鐵幹氏は新体詩に一生面を開きて鐵幹調といふ名目をさへ生ぜしめたる人なり其の作るところ生硬廣淺の病なきにあらざるも亦能く縱横馳騁能く其の言はんと欲する所をいふ他の詞華言葉を弄して自ら喜ぶものと撰を異にす本書は其の詩を纂めたるものなり。

◎日本人越智處之助君

明治評論に東西南北を評して「東西南北を以て明治新体詩界失敗の歴史として殆んど完全なる資料を備ふる事を認むるのみ」と言ひ一方には「少しく成功の曙光を認めし者は獨り「羽衣雨江桂月烏山

一派の古調と、天遊天來醉茗一派の新調とあるのみ」と言へり。吾未だ古調派新調派なる者の新休詩を見る事多からざる故に比較的拙巧を明言し難しと雖も今迄見る所に由れば東西南北の方寧ろ稍成功したりと言ハざるを得ず。縱し一歩を讓りて優劣なしとするも東西南北調は古調派新調派といへる者と並列して毫も遜色あるなし。評者の不調和とする者若し句の長短、調の變化を言ふならば、そは老歌人が古今集の模型を出る能はず老畫師が祖先の殘せる粉本の外一事一物を畫かざると同じき淺見のみ。又青年文が露骨の點に於きて之を攻擊するは短所を見て長所を見る能はざるのみ。鐵幹の作露骨に傾くは固より其獘なり。然れども露骨と相對して伏在する長所は直截なり。鐵幹の作往々一刀物を斷ずるが如き快あり。斯く言へばとて吾は鐵幹を以て全く成功したりと爲すに非ず。全く瑕瑾無しと爲すに非ず。否鐵幹には寧ろ瑕瑾多きことを認め且つ鐵幹を以て純粹の詩人とは爲さゞるなり。若し强ひて詩人の名稱を下さバ不具なる詩人なるべし。唯世間鐵幹の長所を見る者少し、故に一言す。

◎太陽文學記者君

幹にして爭でか死なんわれ死なば男子の歌ゥまた廢れなむ、と高吟したる鐵幹の意氣抱負大に壯とすべし。東西南北、賴むる所素より皆完璧にあらず。故らに豪放を衒ひ、强ひて氣勢を張るの獘なきにあらずと雖も、まゝ斬新奇拔、舊作家の企て及ばざる所のものあり。われ等をして憚り無く言わしめバ、鐵幹が是著は世評以上の價値あるものにして、後代の史家が明治詩壇の注意すべき一現象として特筆するに足るものなり。今の人、好で他の作を是非すと雖も、われ等ハ寧ろ鐵幹が世評の甚だ預想し難きに係らず、敢て其信ずる所を取て之を公表したるの志操を嘉せずんばあらず。

◎東京經濟雜誌

所謂新躰詩及び漢語交りの和歌數十首を集む。字句精練を欠くに似たりと雖も、其の想の奔放なるは作者の才の靈活なるを見るに足る。但し其の朝鮮官妓張白梅なる者を悼む歌の序を讀み、我は鐵幹の艷福家たるを知ると同時に、此の如き文字を讀まざるを得ざりし我の薄禍を悲みたり。世上此書を評する幾多の人士中にも必ず同感者あらん。

◎大倭心

鐵幹に望むに、バイロンを以てすべからずと雖、彼は、酷趙

甌北に肖たり、其の才調、其の氣格、其の思想、手は、其の期せずして符合するものあるを知る。

國語の準據未定まらずして、散文だに動もすれば人言を率くに足る日に於て、律語の、容易く他の肯綮に中る能はざるはいむを得ざるのみ、鐵幹の鵠文字の惡評を得るは、才の罪に非ず、勢の不可なるなり、陳吳の功は、却て沒す可からず。景樹の才調を取り、眞淵の氣格を學び、之を驅使するに、雅語、漢語、普通語を以てす。其の形に於て、鐵幹は稍成效せるものと謂ふべきなり。之を以て新體詩失敗中の好左券となすが如きは何の謂たるを知らず。

鐵幹の短所は、舒情に專にして、舒景に粗なるに在り、否、鐵幹は、却て舒景を屑とせざるが如し、是鐵幹の自稱して其の詩人に非ずと云ふ所以か、鐵幹にして、子規子が、俳句に於ける程なりとも、舒景に筆を轉ぜんか、彼遂に測るべからざるなり。

今の詩人は、其の氣魄無きを患ふ、獨、鐵幹は其の過鋭を患ふる也、鐵幹にして、少しく鋒鋩を藏せんか、卷中何ぞ唯、

野に生ふる草にも物を言はせばや

涙もあらむうたもあるらむ
乞兒らが着すてし野邊の朽ちむしろ
くち目よりさへさくすみれかな

の情趣湛然たるもの一章を留むるに止まらんや。

然はいへ、此么麼なる詩卷、長く天地の間に留りて、珠光三分劍氣七分、讀むもの〻眉目に瑩燿して、後の多情多感なる少年男兒を感發せしむるものあるべし。

鐵幹、遂に朽ちざる也、訂正再版の一本を得て、思ふところをかくなむ。

なでしこ以下批評數十種蒐集中

明治三十年一月十五日印刷
明治三十年一月三十日發行

天地玄黃奥付

定價金貳拾錢

編輯所　淺香社
著者　與謝野寛
發行者　東京市麹町區三番町五十三番地　三樹一平
印刷者　東京市神田區錦町一丁目十三番地　橘磯吉
印刷所　東京市京橋區弓町二十三番地　三協合資會社
東京市京橋區弓町二十四番地

發行所　明治書院
東京市神田區三河町二丁目十六番地

特別大賣捌　東京市神田區新石町　同文館
大坂市東區備後町四丁目　吉岡平助

第一高等學校教授　國學院講師兼學監
跡見女學校講師　國語傳習所講師
正七位落合直文先生著

中等國文讀本

定價金八拾四錢　郵稅一冊金四錢

卷一卷二　定價各金貳拾錢
卷三卷四　定價各金貳拾貳錢

〈文部省檢定出願中

和裝上等改良半紙
全四冊

本書發行以來、府下は勿論各地方の新聞雜誌よりは、擧りて好評を與へられ、殆ど一小冊を爲す程となれり。剩へ各地の中學校、師範學校、高等女學校等よりは、續々採用の榮を辱うせり。編者は、多年第一高等學校國語科の教科書に充つるを以て主として、猶、尋常中學校、高等女學校の教科書にも適するやう編纂せられたり。通編四卷、各學年に二卷を用ゐるものとし、第一學年(二冊)に第二學年(二冊)には德川時代の文章にし

府下大賣捌所

東京水野慶次郎堂
同長島文昌堂
同林平次郎
同小林喜右衛門
同杉本七百丸
同榊原友吉
同大倉黑書店
同目黑書店
同文海堂
同北隆館
同松邑吉
同東京孫太郎
同中邦堂
同有斐閣
同西田屋支店
同上田屋
同敬業社
同武藏書店
同渡邊書店
同田中文志堂
同尾呂書店

地方大賣捌所

同柏屋書店
同福島文昌堂
同盛文堂
同梅原書店
同都宮文源太郎
同尚書代正太郎
同宇都宮書店
同目黑書代正太郎
同五十風太右衛門
同岡澤平右衛門
同長尾十郎
同主子書店
同前橋書店
同山形屋
同福島屋
同東京堂
同鴻巢書店
同宇都宮書店
同札幌屋
同名古屋書店
同津山書店
同同田古川嶋九右衛門
同長田小三郎
同多賀一郎
同博文堂
同煥文堂
同豐島屋
同三輪書店
同永住書店
同川中島書店
同小田瀨書店
同東盛堂
同甲府書店
同長野書店
同松本書店
同仙臺書店
同同田
同秋田書店
同秋田書店
同秋田書店
同福井書店
同熊谷書店
同鹿兒島書店
同岡山書店
同博多書店
同島取書店
同廣島書店
同山口書店
同和歌山書店
同國松山書店
同柳澤正喜太郎堂
同水澤琴林堂
同高木清文書
同鶴見書店
同大村藤書
同東海新鮮林兵衛
同成田進書
同木內書店
同日崎書店
同長田書店
同吉見幸次郎
同日金澤書店
同積善堂書店
同積善堂書店
同山本書店
同武井書店
同中田文善書
同宮崎書店
同桂山書店
同魁日支店
同中田書陽支店

て、華麗なるもの莊重なるもの、雄渾なるもの、流暢なるもの、國文として諸體備はらざるなく、生徒作文の軌範たらしむるも、毫も遺憾なきなり。

東京府城北尋常中學校長　今泉定介先生校閲
日本中學校講師　鳥野幸次先生編

中學國史

上卷　定價　金貳拾錢
下卷　定價　金貳拾五錢　郵稅各金四錢

訂正再版　全一冊

方今、各中學校の教科書として、用ゐらるゝ、日本歴史の數多しと雖も、その弊は概して高尚過大なるにあり。中學校令改正以來、高等小學の二年を終りて直に入學し來れるが如き程度の學生に向ひては其不適當なるや言を待たず。本書は專らその邊の程度を計り、平易の文章を以て、簡明なる記述を勉め、しかも國史上の事實を網羅して遺さゞる等、以て著者の苦心を見るべし。その中學初級の好教科書として遺憾なきことは、本書の出版以來、數月ならざるに既に左の諸學校教科書として續々御採用の榮を賜れるに徴して知り給はむことを望む、

東京府城北尋常中學校　東京明治義會尋常中學校　東京集善尋常中學校　東京女學館　東京愛敬女學校　東京女學校　東京明治女學校　東京淑德女學校　東京學校　兵庫縣尋常中學校　島根縣尋常中學校　東京本郷商業學校　高等女學校　新潟縣長岡尋常中學校　岡山縣尋常中學校　栃木縣山梨縣奈良縣其他各府縣教員講習科等

第一高等學校教授　落合直文先生校閲
明治書院編輯部編纂
中等教育國文讀本　第一編

十六夜日記讀本

全一冊　定價金拾錢　郵稅金二錢

細註附錄付　定價　金十五錢　郵稅　金四錢

第一高等學校教授　落合直文先生校閲
明治書院編輯部編纂
中等教育國文讀本　第二編

竹取物語讀本

全一冊　定價金十錢　郵稅金二錢

細註附錄付　定價　金十五錢　郵稅　金四錢

第一高等學校教授　小中村義象先生校閲
明治書院編輯部編纂
中等教育國文讀本　第三編

土佐日記讀本

細註附錄付　定價　金十五錢　郵稅　金四錢

第一高等學校教授　落合直文先生校閲
明治書院編輯部編纂
中等教育國文讀本　第四編

全一冊　定價金十錢　郵稅金二錢

方丈記讀本

細註附錄付　定價　金十三錢　郵稅　金四錢

高等師範學校教授　畠山健先生校閲
明治書院編輯部編纂
中等教育國文讀本　第五編

全一冊　定價金九錢　郵稅金二錢

神皇正統記讀本

全一冊　定價金二十錢　郵稅金四錢

欠

MISSING

高嶺の雪

（野中至氏夫妻石版肖像及び富士山絶頂劍峯觀測所寫眞石版入）

全一冊　定價金廿五錢　郵税金四錢

故小中村博士が、史學考證の事に精通せられたるは、公論の存する所。この書、わが神代の歌舞音樂よりして、德川氏時代の歌舞伎、淨瑠璃、小唄、長唄、三絃、鼓弓の類に至るまで、その事實、起原沿革等を細叙して、剩されたるものなく、猶、數十葉の圖畫（長命晏春、川邊御楯兩氏）を附して一々、讀者の知解と、記憶とを便ならしめらる。博士の遺文によれば、博士生前の交友、重野安繹、栗田寛、小杉榲邨、柏木探古先生等、現今考古考証の學に名ある、諸先生も亦、この書の著作に就て、互に意見を闘はされ、發明せられたるもの、寡からすと云ふ。その事實の正確にして根據あり、其叙事の精密にして親切あるは、この種類の著書中、空前絶後の良書たることを言を俟たず。直接、歌舞音樂のことに關係ある人は、勿論貴女紳士、文學者、歴史家、女學生等の諸君は必ず一本を藏し玉はざるを得ざる一大有益貴重の珍書なり。

定價金七拾錢　郵税金六錢

森の家主人落合直文先生著

昨冬、野中至氏が富士越年を企つるや、その妻千代子氏と共に登山して、其業を助けたることは、普く世の人の知るところ。されど、未だ其事蹟を審に記したるものあるを聞かず。こたび、落合直文先生、その不屈不撓の精神を、廣く世に知らせばやとて、例の流麗なる文章もて、そを綱叙せられたり。題して『高嶺の雪』といふ。附錄には佐々木信綱先生の『小夜嵐』といへる短歌十數首及與謝野鐵幹先生の『野中千代子君』といふ新体詩を添へたり。

第一高等學校教授　小中村義象先生校閲
東京女學館、愛敬女學校、香蘭女學校講師國分操子先生編纂
中等教育國文讀本　第十一編

今昔物語讀本

全一冊　定價金廿五錢　郵税金六錢

第一高等學校教授　落合直文先生
第一高等學校教授　小中村義象先生校閲明治書院編輯部編纂
中等教育國文讀本　第十二編

大鏡讀本

全四冊（花部）定價金十八錢（風部）郵税金四錢　定價金廿二錢（月部）郵税金六錢　（鳥部）定價金十八錢　郵税金四錢　定價金廿二錢　郵税金六錢

序文　森鷗外君、井上哲次郎君、大口鐵二君、坂正臣君、正直正太夫君、小中村義象君、正岡子規君、落合直文君、佐々木信綱君、原抱一庵君、國分青厓君

題字　朝鮮前内務大臣　俞吉濬君　朝鮮前軍務大臣　趙義淵君

鐵幹　與謝野寛先生著

東西南北

訂正五版　定價金二十錢　郵税金四錢

附錄には諸新聞雜誌の批評數十頁を添へたり

與謝野鐵幹先生は朝鮮より歸つて、本書を公にせらる。先生の短歌と新体詩とは、世に多くして、現代の歌人新体詩人中優に一頭地を放出せらるることは、諸家の序之を悉して毫末の憾みあるなし。今や和歌と新体詩と併せて一大刷新を要するの時に當り、本書の需用頗る急にして、出版後三ヶ月ならざるに、既に、版を重ぬること五回、賣高の多きと、實に七千部の上に上れり

春畝伊藤侯題字。矢土錦山先生序文。落合直文先生序文
森槐南先生題詞。末松青萍博士題詞。國分青厓先生題詞
本田種竹先生題詞。宮崎宣政先生著

晴瀾焚詩 附錄 李白傳

定價金三十錢
郵稅金四　錢

石破れ天驚くとは春畝伊藤侯の題贈せらるゝ處晴瀾詩を焚くは燭を燃すが如く涙一寸紅に燭爲めに綠なり照らし看る才鬼嘔血の痕夜哭丸丸粟雨を成すとは槐南大來先生の評定せらるゝ處漁郎麗才高く群を出づ碧落秋掃ふ蒼梧の雲とは青厓國分先生の品隲せらるゝ處なり普天下有情の錦繡才子一瞥せよ

青厓山人國分高胤先生著

詩童狐 評林 第一集

定價金貳拾錢
郵稅金四　錢

詩賦吟詠に托して時事を諷刺したるは、近代實に青厓先生を以て嚆矢とす。其直言危筆、權豪に屈せず、以て天下の耳目を聳動し、以て一世の人心を警醒せしは、江湖の普く知る所今茲に贅せず、八九年來、政治の變遷、歷々徵すべし。稱して明治の詩史と云ふも可なり。

明治書院新刊圖書

朝鮮大院君李昰應大人題字。

鐵幹與謝野寛先生著

天地玄黄

定價金貳拾錢
郵税金四　錢

『東西南北』以後の作を輯めて『天地玄黄』と題す。『東西南北』を讀み給へる諸君は、又本書を一讀し給はざるべからず。著者が短歌と新体詩とに於ける技能に至ては、世既に定論のあるありて、多く言ふを要せず。本書の成らむとするや、朝鮮雲峴宮の老雄大院君、特に著者のために『詩境』の二字を題して寵贈せらる。君の書、龍蛇飛動し、滿紙たゞに握さの概あり。石版に縮寫して、卷首に掲げたるもの、即ち是なり。

芙蓉日記

野中千代子君著（萬朝報女大學第一等受賞者）

近刻　全一冊

欠

MISSING

故文部大臣井上毅先生序
第一高等學校教授正七位落合直文先生著

日本大文典

全一冊

第一篇三版第二篇四版第三篇二版定價各金四十錢
郵稅第一篇八錢第二第三篇各六錢○第四編近刻

世に文法を學ふべき書、多しといへどもいづれも完全ならざるは、世人の皆認むる所なり。落合先生、常に之を歎せられしが、幾多の春秋を經て、刻苦研磨、茲に一大文法書を著されたり。古今の文法書を參酌して、その精を拔き、その粹をとられたるは勿論、その議論の精覈詳密なると、古人未發の考案多きとは、實にこの書の特色なり。本書出版日猶淺きも、既に都下にありて、各學校の教科書に採用せられしのみなら

ず、各地の高等學校、師範學校、中學校、高等女學校等の教科書、及び參考書として、目下陸續採用の恩命に接し居れり。其近日を以て公けにせむとする**第四編文章論**の如きは恐らく空前の創見に出でたるものなるを信ずるなり。

發行人 東京神田區三河町二丁目十六番地 **三樹一平**

發賣元 仝 日本橋區本町三丁目 **博文館**

71
335

71
335

088052-000-2

71-335

天地玄黄

与謝野　寛／著

M30

DBG-0149